

# ホンダワラ類増殖技術開発試験

山内 弘子

## 目 的

本県日本海沿岸にはホンダワラ類藻場が広がり、沿岸水産資源の維持保全に重要な役割を果たしている。そのうち、ヨレモクは経済価値の高い海藻の一種であるエゴノリの着生基質の主体となっているが、最近衰退しつつある。このため、そのような海域でヨレモク藻場の造成手法を検討した。

## 調 査 方 法

幼胚供給によるヨレモク群落の拡大方途を検討するため、深浦町鱸作地先水深5 mにある3 m四方のサングモ場を試験区とし、平成13年5月23日に生殖器床を持つヨレモク主枝を2 kgずつ、9つの網袋に入れ、均等に固定した。そこから300 m北側にある同様な水深、植相の場を対照区とし、平成13年10月4日、平成14年6月12日、同年10月18日、平成15年3月21日に両区に発生したヨレモクの個体数を求めるとともに、それへのエゴノリ付着状況を観察した。併せて、平成13年10月4日、平成14年10月18日にはヨレモクの体長を測定した。

## 結果および考察

試験区および対照区で観察されたヨレモクとエゴノリが着生するヨレモクの生育密度を表に、両区での生育状況を図版に示した。

表 平成13年5月23日に成熟したヨレモク主枝を設置した試験区および設置しなかった対照区で観察されたヨレモクとエゴノリが着生するヨレモクの生育密度(個体/㎡)

調査年月日	ヨレモクの生育密度(個体/㎡)	
	試験区(エゴノリ着生)	対照区(エゴノリ着生)
平成13年10月4日	110 (0)	0 (0)
平成14年6月12日	38 (0)	0.3 (0)
平成14年10月18日	36 (0)	0.2 (0)
平成15年3月21日	16 (2)	0 (0)

ヨレモクは、対照区では、平成14年6月に0.3個体/㎡観察されたが、平成15年3月には全て流失した。一方、試験区では、成熟したヨレモク主枝設置から5か月後の平成13年10月には、発生個体は平均体長が2.5 cmと小型であるため観察しにくい110個体/㎡の密度で認められ、その1年5か月後の平成14年10月には36個体/㎡と33%に減少したが、生長したヨレモクが確認でき、小群落が形成された。また、1年10か月後の平成15年3月には16個体/㎡と15%に減少したが、それに着生するエゴノリが観察された(表、図版)。

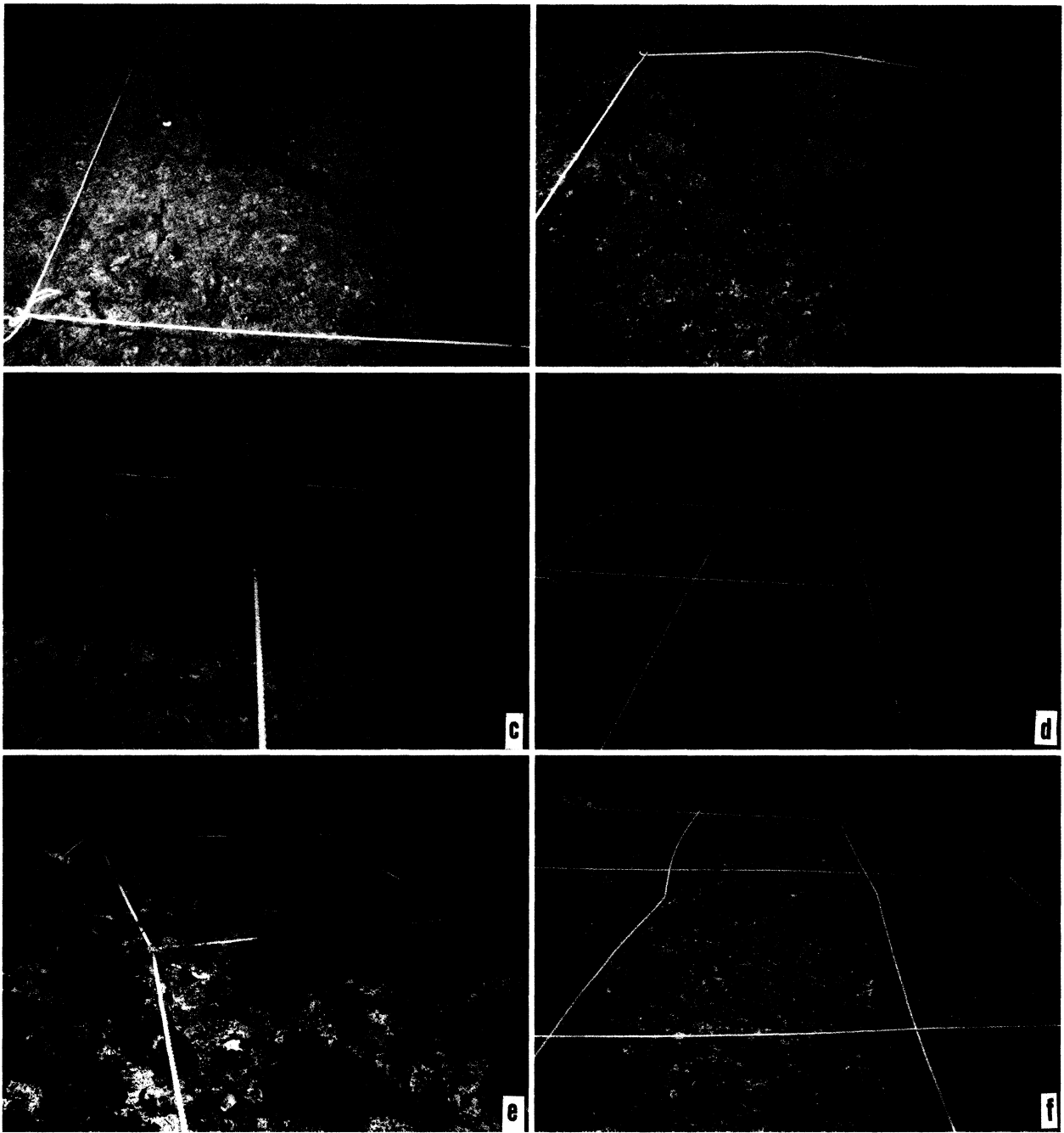
また、主枝設置から1年5か月後の平成14年10月には、試験区に生育するヨレモクの体長は平均8.4 cm

となり、平成11年7月に今別町巽月地先でエゴノリが着生していたヨレモクについて調査した際、その最小体長であった6.5cm以上に生長した。さらに、ヨレモクの現存量は、冬季から春季にかけて藻体の伸長とともに増加する<sup>1)</sup>ため、エゴノリの着生が認められた春季に相当する平成15年3月には、体長の平均値は8.4cm以上に生長したものと推察された。

このことから、ホンダワラ類が生育していない場に成熟したヨレモク主枝を設置し、幼胚を供給することによって、エゴノリ漁場となるヨレモク群落の拡大を促進できることが示唆された。

## 参 考 文 献

- 1) 山内弘子 (2003) : ホンダワラ類増殖技術開発試験. 青森県水産増殖センター事業報告, 32, 319-326.



図版 平成13年5月23日に成熟したヨレモク主枝を設置した試験区および設置しなかった対照区での海藻の生育状況.

- a 主枝設置から5か月後の試験区での海藻生育状況(平成13年10月4日撮影)
- b 試験開始から5か月後の対照区での海藻生育状況(平成13年10月4日撮影)
- c 主枝設置から1年5か月後の試験区でのヨレモク生育状況(平成14年10月18日撮影)
- d 試験開始から1年5か月後の対照区での海藻生育状況(平成14年10月18日撮影)
- e 主枝設置から1年10か月後の試験区に生育するヨレモクとそれへのエゴノリ着生状況(平成15年3月21日撮影)
- f 試験開始から1年10か月後の対照区での海藻生育状況(平成15年3月21日撮影)